

質料形相論的な構成主義

横路佳幸（慶應義塾大学）

1. 現代形而上学における構成主義とは、空間的に一致する数的に異なる個体が構成関係にあると認める立場を指す。たとえば一致する銅の塊ランプルと彫像ゴリアテは、数的に異なる二つの存在者である。この事態を受け入れる立場はしばしば多元論と呼ばれ、構成主義は多元論を説明する最も有望な立場の一つだと考えられてきた。

構成主義者が多元論に立つ最も重要な根拠は、一致する個体は必ず異なる種別概念に属するという点である。彫像や銅の塊、人、猫、河川などを具体例とする種別概念は、**同一性規準**を与える点で独特である（拙論 2018）。種別概念 G の同一性規準によると、 G に属する諸個体の同一性は、それらの間に成立する G に特徴的な規準関係 R_G によって基礎付けられる。たとえば、銅の塊に属するランプルの同一性は、「同じ銅部分を持つ」という規準関係によって基礎付けられる一方で、彫像に属するゴリアテはその限りではない。このとき、ランプルとゴリアテが同一でありえないのは、それらが等しくない同一性規準を与える種別概念に属するからである。

そのうえで構成主義者は、一致する複数の個体は構成体と被構成体の関係、すなわち構成関係にあると論じる。構成主義者の説明によると、個体 x による個体 y の構成関係は次のように説明できる（Baker 2007）。すなわち、種別概念 F に属する x が種別概念 G に親和的な特定の環境 M_G に置かれると、構成体 x は G に属する被構成体 y を新たに構成するようになる。このとき、構成体 x と被構成体 y は時空的に一致し、 x と y がそれぞれ属する F と G は等しくない同一性規準を与える。他方で、構成の成立において決定的な役割を担う環境 M_G は、構成体 x が偶然に置かれる状況・事態に相当し、 x が M_G に置かれることは、種別概念 G に必然的に属する被構成体 y の誕生を促すという意味で構成誘発的な事態である。

上記より構成主義の主張は次のように要約できる。すなわち、ある種別概念に属する構成体がある特定の環境に置かれると、その他の種別概念に属し、かつ構成体と空間的に一致する新たな被構成体が構成される、と。多元論を適切に説明する理論として、私は構成主義が基本的には正しい理論だと考える。それはたしかに、構成体と被構成体の間の関係性、特に非対称性をうまく捉える。しかし同時に、「環境」と「構成関係」という多かれ少な

かれアドホックでさらなる解明を要する道具立てを新たに導入している点で、不備を残す理論だとも言える。構成主義者はこれらを十全に説明せねばならないが、以下で見る質料形相論がその助けとなるのではないかと、というのが私の見立てである。

2. 質料形相論の基本理念は、アリストテレスにおける「作り出されるのは「これ」すなわち個物であり、生成されるものは形相と質料から成る」（1043b17-18）という言葉で表現される。たとえば、個々の人間は、「これなる魂とこれなる肉体の統一体」（1037a8-9）である。これをどのように理解するかについては議論の余地があるが、ここでは差し当たり、現代の質料形相論者による次の理解に従う（Koslicki 2018）。第一に、統一体としての個体は、質料と形相の組み合わせにより誕生する。つまり、個々の個体はまったくの無から謎めいて噴き出すわけではない。第二に、統一体の構造は、質料を特徴づけまとめ上げる形相（または統一原理）によって与えられる。形相は、特定の種によって与えられ、質料を特定の仕方規定することで統一体の生成を促す役割を果たす。第三に、何らかの形相のもとである質料から新しい統一体 U_1 が生成されるとき、その質料もまた何らかの形相のもとである質料から生成された統一体 U_2 でありうる。このとき統一体は、 U_1, U_2, \dots へと階層化される。

一連の特徴づけにくわえて、ここでアリストテレス解釈の一つにならって、形相と実体種を明確に区別しよう（Loux 1991）。この解釈によれば、統一体である実体が実体種に属するのは、形相が質料を規定する**おかげ**である。一方の形相は質料を偶然的に規定し、問題の質料がどのようなかを定める。アリストテレスが『形而上学』で「第一実体は、それに内在する形相であって、これと質料からいわゆる個別実体が生じる」（1037a30-31）と述べる際に念頭に置いていたのは形相である。他方で実体種は、実体が必然的に属する普遍的な実在物で問題の実体が何であるかを定める。『カテゴリー論』でアリストテレスが、個別実体に次ぐ第二実体とみなしたのはこの実体種（種・類）である。そして、形相による質料の規定という事実と、統一体の実体種への帰属という事実または統一体の存在の事実は、形而上学的な説明関係すなわち基礎付け関係によって結ばれる。

上記のように特徴付けられる特定の質料形相論を多元論と組み合わせると、前節の構成主義と近似的な構造を持つ理論が帰結する。実体種と種別概念を同一視したう

えて、構成誘発的な環境を形相に、構成体を質料に、被構成体を統一体になぞらえると、次の**質料形相論的な構成主義**を構想できる。

(HC) 統一体 u が種別概念 G に属するものとして存在するのは、種別概念 $F (\neq G)$ に属する質料 m が形相 f_G によって偶然に規定されるおかげである。

いま、銅の塊に製作者の意図や形状が与えられてはじめて、統一体としての彫像が作り出されるとする。このとき、(HC)は次の説明を与える。第一に、意図や形状に関わる形相と、彫像という種別概念は区別される。後者は統一体ゴリアテが必然的に属する普遍的性質である一方で、前者は後者によって与えられ、質料であるランプルを偶然に規定するものである。第二に、彫像に属する統一体ゴリアテが存在するのは、ランプルが銅の塊という種別概念に属し、かつランプルが特定の意図や形状に関わる形相 f_{Statue} によって偶然に規定されるおかげである。つまり、ゴリアテはまったくの無から謎めいて噴き出すわけではない。第三に、ゴリアテの構造はランプルを規定する f_{Statue} によって与えられ、ゴリアテの同一性は彫像という種別概念によって与えられる。換言すれば、統一体は形相による構造性と種別概念に基づく同一性を持つ。

ここで、種別概念 G に属する個体 u が質料 m と形相 f_G から統一される規準を f_G による**統一性規準**と呼ぶと、 u の統一を基礎付けるのは、 $f_G[m]$ すなわち f_G によって質料 m が規定されることや、 m が G とは異なる種別概念 F に属することなどである。他方で、 G による同一性規準によると、 G に属する x と y の同一性を基礎付けるのは、規準関係 R_G であった。よって、統一性規準と同一性規準、ひいては形相と種別概念の違いは次のように述べる（「 $\Gamma < \Delta$ 」は事実 Γ が事実 Δ を基礎付けることを表す）。

$$(1) (f_G[m] \& F(m) \& \dots) < G(u)$$

$$(2) (G(x) \& G(y)) \rightarrow (R_G(x, y) < x = y)$$

(1)の $f_G[m]$ は、 G に属する個体 u の**統一性**を基礎付ける事実（の一つ）であるのに対し、(2)の $R_G(x, y)$ は、 G に属する個体 x と y 間の**同一性**を基礎付ける事実である。彫像ゴリアテが統一体として存在することは、ランプルが特定の意図や形状によって規定されることなどのおかげであるのに対し、ゴリアテの同一性の成立は、彫像に特徴的な規準関係が成立することのおかげである。(1)で基礎付けられるものが(2)の前件文に含まれるように、個体が特定の種別概念に属することを基礎付ける統一性規準は、その種別概念によって与えられる規準関係が成立するため

の条件を整えるものである。(1)は、(2)と密接に関わるものの、(2)と違いあらゆる個体に適用されるわけではない。何らかの種別概念に属する a は、同一性規準を持つ一方で統一性規準を一切持たないことも可能である。実際、ランプルが最下層の非統一体（いわゆる第一質料）であるとする、それが銅の塊に属することは何らかの形相による規定に基礎付けられるわけではなく、それは他の質料から統一されるわけではない。

3. したがって、(HC)は構成主義に対し二つの興味深い観点を持ち込む理論だとわかる。第一に構成誘発的な環境に置かれることを**形相による規定**と理解すること、第二に説明の足りなかった構成関係のあり様を**形而上学的な基礎付け関係**から明らかにすることである。(HC)の枠組みにおいては、構成関係は現代形而上学で広く浸透している基礎付け関係がもたらす帰結にすぎないものとして解釈可能である。構成主義者が「 x は y を構成する」と述べる時、(HC)の支持者は、それを「特定の形相 f_G が質料 m を偶然に規定することは、統一体 u が当の種別概念 G に属する統一体であることを基礎付ける」と理解する。また、構成関係に特徴的な非対称性は、同じく狭義順序である基礎付け関係の非対称性に由来すると考えることができる。ゴリアテがランプルによって作られ、決してその逆でないことは、特定の意図や形状に関わる形相 f_{Statue} によってランプルが規定されるおかげで統一体としてのゴリアテが新しく存在するようになるということであって、そのとき逆向きの基礎付けは決して成立しない。さらに、構成主義が環境と構成関係を用いて時空的な一致物の間の関係を説明していたのに対し、質料形相論的な構成主義は、多元論で重要な役割を果たす種別概念の例化の事実と、質料に対する形相による規定の事実の両者を基礎付け関係によって架橋することで、一致物の関係を説明する。以上から、構成の仕組みは、特定の質料形相論、すなわち種別概念（種・類）と形相の両者を統合的に理解するアリストテレス的存在論から新たに捉え直すことができると結論付けたいと思う。

参考文献

- Baker, L. R. 2007 *The Metaphysics of Everyday Life*, CUP.
 Koslicki, K. 2018 "Towards a Hylomorphic Solution to the Grounding Problem", *Royal Institute of Philosophy Supplement*.
 Loux, M. J. 1991 *Primary Ousia*, Cornell University Press.
 横路佳幸 2018「認識的な種別概念論を擁護する」、『科学基礎論研究』。

*本報告は、2018 年度日本哲学会林基金若手研究者研究助成による研究成果です。助成決定に携わられた編集委員会および林基金運営委員会の先生方に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。